

- (2) 温湿布を除去する時は、貼用部位を温湯で清拭し、皮膚を乾燥させ、包帯はしばらくそのままにしておく。
- (3) 湿布材料はできるだけ固く絞り、十分な大きさの油紙または防水布でおおう。
- (4) 手術創、創傷などに直接貼用する場合、滅菌操作で行なう。
- (5) 湿布絞りのない場合は材料を細長くたたみ中心部のみ熱湯に浸し、両端をもって絞る。また、他の布に包んで絞るのもよい。

D 冷湿布

1. 必要物品

温湿布の必要物品から次のものを除く。

湿布絞り及び絞り棒
ワゼリンと切綿
ボールの蓋

湯の代りに水

2. 方法

- (1) ボールに水を入れ（必要時水を入れる）その中に湿布材料を浸す。
- (2) 貼用部位を出し、腹帯を用いる場合は先にとおしておく。
- (3) 湿布材料を固く絞って広げ貼用部位にあてる。
- (4) 油紙又はビニールを当て包帯をする。

(小玉香津子)

編集デスク <21>

「道徳教育」などというといかめしいが、「人づくり」といえばややことはやわらかに聞こえる。いずれにしてもその内容はそう違ったものではないところに以下の問題がある。「人づくり」とは、本来すぐれた有能な人物をつくることの意味であるから、それ自体は教育であって、道徳教育とはイコールではない。しかしながら、目下教育のかなり重要な意味が、道徳に向けられているところに、戦前から戦後を通じての教育の担う問題の核心がある。

倫理学という学問体系がある。人間は社会的人間であるから、社会の中でどのようにしたら人間としての正しい道を踏みおこなうことができ、世の中がうまくゆくかということを考える体系が、学問としての倫理学である。倫理学の具現されるものが道徳である。だから、道徳それ自体は、人間である以上、誰でも大切に守ってゆかなければならないもの

のであり、道義地におちるところにすぐれた社会生活は営まれないし、その中に生きる人間は不幸である。

日本人を律してきた倫理学は、儒教的なものの考え方であった。また仏教的な世界観に裏づけられるものであった。それが、西欧的近代を移入することによって、プラグマティズムやキリスト教的なものも流入して、旧時代の一元的なものではなく

人 づ く り

——長谷川 泉——

なった。混乱はそこに起こったともいえるが、移入したものは、移入したままで通用するわけではないから、時代がたつにつれて、伝統的なものと渾融して、次の時代を律する新しいものをうみ出してゆくことになる。歴史は流動するものであるから、一定不変のものはない。人間がかかわる限り、人間の主体が変革されることによって、考え方は変革される。

「人づくり」の方向は多分に政治とも関連する。そこに道徳律の内容が問題にされてくる。一般概念としての道徳というものを人が身につけている社会は未開な野蛮な不幸な社会であることはあきらかだが、さりとて道徳の名において方向づけられるものが、不動のものではなくて、人のきめるものであるから、そこに方向づけの内容の問題がからんでくるのである。戦後はとくに混乱の時代であったから、その方向づけを行なうことができないで、道徳教育を放てきしてしまった。あつものにこりてなますを吹いてしまったのである。そして不幸な社会と、道徳観念のない不幸な人間をある時期作り出してしまった。その汚点はもはやとりかえしがつかない。人間の教育というものは一朝一夕でできるものではないし、教育には時期があるからである。鉄は熱いうちにきたえなければならず、また六十の手習いでは及ばないからである。今の「人づくり」は何年も何十年も先でなければ実ってこないからである。